

# 目をこらして (11)



私は、詩が好きです。詩を声に出して読むのは、特に好きです。体が求めている！ という感じで、読みたくなってしまう時があります。

帰り道に何気なく寄った本屋で、大好きな川崎洋さんの詩集を見つけて買いました。うれしくてうれしくて、夕食の後で、誰に聞かせるという訳でもなく朗読を始めました。すると娘の目がきらりと光り「かずほもね、詩を作ってるんだ」そう言うと、自分の詩を語り始めました。

『いるかさんのショー』

すいぞくかんに いった

いるかのショーをみていたら

いちばんまえのせきでみていたら

さいごに、みずがジャーツとかかった

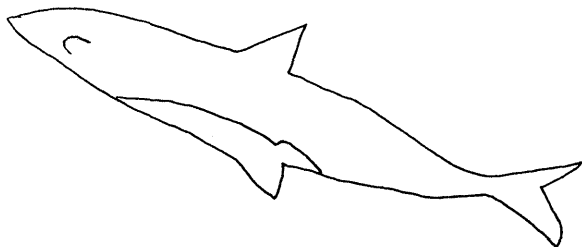
おきにいりのスカートできていて

そこきたないみずがかかって

とても さみしかった

とても かなしかった

とても つめたかった



絵と文 宮里暁美 (目黒区立ふどう幼稚園)



# 耳をすまして

私が、いい気分で詩を朗読していた時の雰囲気そのままに、娘も、抑揚をつけて、「とても」の三連の部分はテンポを上げて、最後の「とてもつめたかった！」はクライマックスの盛り上がりをつけて語っていた。

朗読という方法を通して空間の中に投げ出された詩のリズムが、娘の体の中に入り込み、娘の体験と結びつき詩という形になり、こうして語られている。そんな驚きに包まれて私は、娘の言葉を書き留めた。

『かたつむりさんのさんぽ』

げつようびに、あめがふっていた

ともだちのおうちにいこうとしていたら

わたしは、かたつむりさんを見つけた

はじめは、一ひきだけつかまえた

かえりに、二ひきをつかまえた

一ひきだけ ちいさかった

二ひきめは、からがとれそうになつた

三にんあわせて、いっぱいんちがたまっていた

あらうのが たいへんでした

